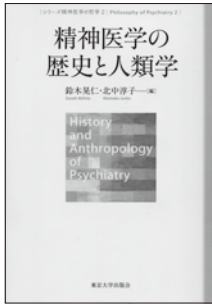


■ 書 評



シリーズ精神医学の哲学 2 精神医学の歴史と人類学

鈴木晃仁・北中淳子 編
東京大学出版会
2016年9月 272頁
本体価格 4,800円+税

本書は、近年、精神医学自体やそれを取り巻く状況が大きく変容しつつあることを踏まえ、精神医学と精神障害概念の基盤を問い直すことを目的に作成された「シリーズ精神医学の哲学」全3巻の第2巻に位置づけられる。国内外の歴史家・人類学者などが日本の事例を多く取り上げながら、メディアや宗教、家族など、精神医学の歴史と人類学に関わる多様なトピックを論じる。全体は、第1章「総論—精神医学の歴史と人類学」(鈴木晃仁・北中淳子)に引き続き、第2章「精神疾患の声の歴史—近代日本の精神科臨床と文学」(鈴木晃仁)、第3章「専門職間闘争における精神科医—19世紀末の英米における業域の拡大」(高林陽展)、第4章「精神医学と精神療法における宗教—探求のための枠組み」(クリストファー・ハーディング)、第5章「精神医学とマスメディアの近代—20世紀初頭日本の新聞メディアを事例として」(佐藤雅浩)から成る第1部「精神医学の歴史」と、第6章「文化と病いの経験」(江口重幸)、第7章「精神医学による主体化—精神療法とバイオロジーの人類学」(北中淳子)、第8章「日本社会における精神医学の権限と家族」(エイミー・ボロヴォイ)、第9章「人類学・精神医学・科学—PTSDにおける記憶の生成」(アラン・ヤング)から成る第2部「精神医学の人類学」から構成されている。

本書の論考では、精神医学を構成するエージェントの複数性とそれに影響を与えている要因の多

様性の中から各々の問題を分析して、精神医学の姿を内側と外側から明らかにすることを目標にしている。第1部では、精神科臨床と同時代の文学が患者の語りを共有したこと(第2章)、変容する精神疾患と臨床の構造の中で医師はどのように専門職を定義したか(第3章)、精神系学問分野と宗教はどのように共存して人間や自己の問題を議論したか(第4章)、マスメディアにおける精神医学の啓蒙は読み手たちの自己意識をどのように変えたのか(第5章)について議論が展開されている。第2部では、人類学が精神医学にもたらす視点の可能性に関して、文化精神医学の立場から精神科臨床実践の人類学的分析・批判について(第6章)、精神医学に潜む人間観の分析について(第7章)、文化人類学的視点による日本の家族観について(第8章)、臨床を超えた「科学」としての精神医学知がどのようにローカルに形成され、グローバルな普遍性を帯び始めるかについて(第9章)考察が行われている。

精神医学の内側からの視点に慣れきっている私たち精神科医療関係者にとって、精神医学の外側から提供される様々な切り口による問題提起は非常に新鮮であり、考えさせられる課題を多数含んでいる。旬な話題が取り上げられたオムニバス形式の本書は、ひとつひとつの話題が比較的コンパクトにまとまっていて、読みやすく、隣接する学問領域への興味もかき立てられる好著である。一方で、話題によってはかなり大きな課題のごく一部しか扱っていないため、議論に少々物足りなさを感じないわけではない。しかし、精神医学を外側から俯瞰するような大きな視点に立って、現在の精神医学を考え直し、未来の精神医学を展望する機会を与えてくれるという意味で一読をお勧めしたい。

(久住一郎)